

分裂文の「の」と「ダ」

森 川 正 博

0. はじめに

日本語の分裂文における特徴と、それを構成する要素の統語上の位置や機能・意味などが近年明らかになってきている (Hoji (1987, 1990), Hasegawa (1997), Hiraiwa and Ishihara (2002), 森川 (2009, 2011b) などを参照)。森川 (2011b) は、Rizzi (1997) の分離CP構造を採用してHoji (1987, 1990) の示した2種類の分裂文を分析し、焦点位置に後接する要素のカテゴリ (繫辞・モーター) とその要素の省略の可否に関わる制約を提示した。その過程で、前提節である「の」節については深く立ち入らずに議論を進めた。Hoji (1987) は、この「の」は焦点要素が名詞句 (NP) のときはNで、格助詞付きの名詞句 (NPc) あるいは前置詞句 (PP) のときは補文標識 (C) とした。森川 (2011b) では、「の」がNである場合の分裂文 (P分裂文) についてはそのまま受け入れる一方、「の」がCである場合の分裂文 (C分裂文) についてはその「の」節をすべて定性句 (FinP) とは断定できないため、節標識句 (CMP) として議論を進めた。本稿では、C分裂文の「の」節が、純粋な統語領域でFinPとして機能するほかに、談話に関わる領域でも機能することを見ていく。

本稿の構成は、次のようになっている。第1節で、C分裂文が「のダ」構文から派生するという見解に沿って、分裂文の分析の背景を提示する。第2節では、「のダ」構文の「の」節内にモダリティ要素も生じうる事実から、C分裂文の「の」節と時制要素との関係を明らかにし、「の」節は

談話レベルと統語レベルのそれぞれに生起しうることを主張する。それを受けて「ダ」の取り扱いに関して森川（2011b）を再考する。第3節では、分離CP構造における「のダ」構文の「の」節の位置とC分裂文の派生について議論する。第4節では、C分裂文の「ダ」を焦点句（FocP）のFocと仮定する見解に対し疑問を提示することによって、その「ダ」が法性を持った助詞あるいは助動詞であることを肯定する。そして、第5節では、本研究の結論を述べる。

1. 背景

近年、英語やイタリア語などを基に統語構造と談話構造のインターフェイスに焦点を当てたRizzi (1997)の分離CP構造が、対照研究の観点から日本語の分析にも広く取り入れられてきている（Hiraiwa and Ishihara (2002)、渡辺（2005）、長谷川（2010）などを参照）。この見解では、統語構造は文の「命題」内容を表す。その命題のカテゴリはIPである。そしてその上位に、文が定形か非定形かという時間軸に関するFinP層が位置する。更に、そのFinP層の上位に位置するのは、従来ではCP層1つであったのが、RizziはFocP、話題句（TopP）、そして発話力句（ForceP）の順で上に層が重なるとしている。（なお、TopP層は複数生起しうるが、その点については本稿では立ち入らない。）これらの階層性は、基本的に（1）のような形式で表せる。

（1）[ForceP [TopP [FocP [FinP IP Fin]]]]

この見解に従い、森川（2011b）では、日本語の分裂文末の要素「ダ」の解明を試みた。その分析の際、「のダ」構文の「の」節に時制要素が後続することも指摘した。そのために、「の」節を純粹に統語現象を表すFinPというカテゴリを用いず、節標識CMPとした。（この点は、森川（2009）で補文の節だけをForcePではなくCPと表示したこととも関連する。）その分析を要約すると、次のようになる。

分裂文の1種類であるP分裂文は、繫辞文と同様の構造を持っている。

つまり、焦点位置の要素NPは、基底生成されるのであって、「の」節内からの移動によるものではない((2)を参照)。一方、C分裂文は「のダ」構文を基底に持ち、その派生過程で要素XP (NPc / PP) が「の」節から移動し焦点となる((3)を参照)。

(2) P分裂文:

[NP … [の]] は NPダ

(3) C分裂文:

a. 基底: [ForceP … XP … の] ダ (「の」ダ構文)

b. 焦点要素移動: [ForceP [FocP XP [CMP … の]]] ダ

c. 「の」節移動: [ForceP [TopP [CMP … の]] は [FocP XP]] ダ

(3a)において、要素XPがC分裂文の焦点と解釈されることからその移動先は、(3b)で示したように、談話要素に関わるFocPの指定部とした。この点は、Hasegawa (2011)も同様の分析を提示している。ただし、文末の「ダ」のカテゴリについては言語学者によって見解が異なる。Hiraiwa and Ishihara (2002)、Hasegawa (2011)などでは、「ダ」はFocと仮定している一方、森川 (2009, 2011b)ではほかの終助詞と同様、モーダルと仮定している。「ダ」のカテゴリについては、第4節で議論する。)XPの移動後、残部節である「の」節が、TopPの指定部へと移動し、(3c)の構造となる。

C分裂文に関して分離CP構造を採用する大きな利点は、要素がFocPの指定部位置に移動することで、その要素の焦点の解釈が構造上、反映されることである。逆に言えば、ある要素が焦点の解釈を受ける場合、それがFocPの指定部に位置することが必須条件となる。この点は、次の繫辞文からも支持される。

(4) a. 太郎が学生です。

b. 太郎だけが学生です。

(4a)は2通りの解釈が可能である。1つは、主語「太郎」に付く格助詞「が」が「中立叙述」を表す(久野1973参照)。もう1つは、「～だけ」という唯一性の内容の「焦点」を表す。(これは、Kuroda (1965)、久野 (1973)

では「総記」と呼ばれ、三上(1963)、野田(1996)では「排他」と呼ばれた。) 中立叙述の「が」は統語上、IP内に位置する一方、焦点の「が」はIP内からその上層のFocPの指定部へ移動すると考えると、(4a)の文の曖昧性への説明が可能である。なお、(4b)は、「が」が付いた項が「唯一性」を表す副助詞「だけ」(あるいは「のみ」、「ばかり」など)を含むので、この項のFocP層への移動が義務的となり、一義的な解釈となる。このように、ある要素が焦点と解釈される場合、分離CP構造ではFocP層が重要な役割を果たすことになる。

分離CP構造を用いても未だ明らかになっていない1つには、森川(2011b)でも指摘した「の」節のカテゴリとその構造上の位置がある。例えば、(5)のように、「の」節に時制を伴う要素が後接できるという事実から、「の」節はIP層直近の上位に位置する定性句FinPと断定するには問題がある。

(5) [花子がこの本を買ったの] ダった。(森川 2011b: 43)

この点を、次節以降で明らかにしていきたい。

2. 「の」節と「ダ」

本節では、話し手のみが関わるモダリティ要素(対事的モダリティ(Mods))が、「の」節内に生起するという事実を基に「の」節の全体像を示し、それに後続する時制要素をどうとらえるべきかについて考察し、繋辞文と対照する。

森川(2011b)で提示した、「のダ」構文がC分裂文を含み、かつそのC分裂文がMods「かもしれない」を含む例(6a)を見てみよう。

(6) a. [CMP2 [CMP1 花子買ったの] は この本を *(かもしれない) の] です。

(森川 2011: 47)

b. [CMP2 [CMP1 花子がこの本を買ったの] *(かもしれない) の] です。

(6a)の文は、(6b)から派生する。つまり、(6b)は、「のダ」構文内にもう1つの「のダ」構文を含むものである。森川(2011b)ではC分裂文末にはモダリティ要素は必須のもので、話し手と聞き手が関わる対人的モデル(ModSH)、あるいは対事的モデルが生起しなければならないことを示した。「の」節CMP₁の「の」は、談話に関わるモダリティ要素を含まないので、命題の時間軸に関わるFinと仮定できる。しかし、CMP₂の「の」はMods「かもしれない」を含むので、Finとすることに矛盾が生じる。では、対事的モデルの生起する構造上の位置はどこかという、(6b)における語の順序からFinP層とFocP層の間に位置すると考えられる(森川(2009)も参照)。すると、CMPは統語レベルと談話レベルの両方に生起できる節であると結論付けることができる。

そこで、統語レベルのCMPはFinPと言い改めることができるが、談話レベルのCMPはどのようなカテゴリなのか。この疑問に答えるには、前節の例文(5)に関して述べた時制を考慮する必要がある。

(7) a. 太郎は来るかもしれない。

b. 太郎は来るかもしれないなかった。

文末のMods「かもしれない」の時制は、(7a)では非完了形(現在形)だが、(7b)では完了形となっている。ここの時制辞は、命題を包含するIPの主要部Iに位置するものとは、構造的に異なる。つまり、「かもしれない／かもしれないなかった」は、IPの上位に位置するため、完了・非完了の時制要素を含むModsであると仮定する(森川(2009)も参照)。このように、話し手の心的態度を表す談話レベルでも、時制要素が存在する。よって、談話レベルでもFinPと同系列のカテゴリ、“FINP”を設けることが妥当だと考えられる。¹ この仮定は、森川(2009)、Hasegawa(2011)が指摘した、繫辞文とC分裂文における異なる「ダ」の時制の取り扱いの議論に沿うものでもある。

まとめると、「のダ」構文やC分裂文における「の」は、時間の定形・非定形に関わるカテゴリで、統語レベルでは命題の時間軸を表し、談話レ

ベルでは話し手の心的態度の時間軸を表すものである。前者の「の」節はFinP、そして後者の「の」節はFINPと表記した。

「の」節のカテゴリが明らかになったこの段階で、それに後接する要素「ダった」のカテゴリについて例文（５）（再掲）を用いて議論し、森川（2011b）を再考していきたい（注１参照）。

（５）[花子がこの本を買ったの]ダった。

森川（2011b）では繫辞「ダ」は、主語と述語を結合させるという本来の機能のほかに、「の」節１項のみを補部にとることができるとし、「のダ」構文（５）の「ダった」に繫辞機能が見られるとした。その際、C分裂文末に必須のモダリティ要素を示すために、空モデルを仮定しなければならなかった。しかし、本稿では森川（2009）に立ち戻り、（５）の「ダった」は完了の時制を持ったModsと仮定する。その根拠は、次の３点にある。まず、FinP層の上位に「ダった」が生起する位置は、談話要素が関わるという点にある。第２点目の根拠として、「かもしれない」などほかのModsと並行して生起しうる点にある。そして第３点目は、次の「のダ」構文に「ダった」の「想起」の用法が観察できることに関連する。

（８）思い出した、[花子がこの本を買ったの]ダった。

「想起」の用法とは、森川（2011b）でも取り上げたように、「過去にいったん認識していたことを忘れていて思い出した、ということを表すタの用法（寺村1984: 339）」であり、モダリティ性を持つものである。

（８）の「ダった」がModsであるため、（５）もその文の「断定」の解釈から「断定」の用法も持つとみなすことに矛盾はない。つまり、話し手が「の」節を客観的に叙述するという意味において「断定」と考えることができる。またModsは、主観的認識を表出できる領域にあるので、「ダった」は主体である話し手の主観的断定と考えることもできる。ただし、その場合、聞き手は関与しない。（話し手の主観が聞き手に及ぶ場合は、時制辞が付かない「断言」の助詞「ダ」となる。森川（2009）を参照。）つまり、「のダ」構文の「ダった」は、完了時制の形をしたモデルで「想起／

断定」を表す。

もちろん、どの「ダった」もモーダルだとは限っておらず、繫辞文の繫辞「ダ」+過去時制辞「た」の連鎖を否定するものではない。そのことを具体的に（9a）の繫辞文で確認しておこう。

（9）a. 太郎は昨日休みダった。

b. 太郎は明日休みダった。

森川（2009）では、（9a）は繫辞「ダ」に過去の接辞「た」が付いたものと分析した。加えて、森川（2011b）では、（9b）は未来を表す副詞「明日」を含むことができることから、空の「想起」用法のモーダルを提案した。しかし、（9b）において、完了の時制辞が未来を表す副詞「明日」と同じIP内に存在すること自体矛盾する。よって、「ダった」全体を想起の用法と修正する。しかし、（9a）の「ダった」は、同じIP内に過去の意味を持つ副詞「昨日」と共起するので、「ダ」が繫辞であることは明らかである。

興味深いことに、（9a）の文でも想起の解釈ができる（「思い出した、太郎は昨日休みダった」）。すると、そこにモーダルが関わることになる。その際、時制辞を内包する繫辞「ダった」と「空モーダル」との連鎖とするのか、あるいは「空繫辞」+ [Mods ダった] とするのかを明示する必要がある。この問題を解決するために、次の（10）－（11）のAとBの会話における「です／でした」の有無を考察してみよう。

（10）A: 太郎は昨日大学に来ましたか？

B: いいえ、来てなかったですよ。昨日、休み*? (でした)。

（11）A: 太郎は今日大学に来ますか？

B: いいえ、来ません。今日、休み (です)。

（10B）の「でした」を省略すると不自然な文となるが、（11B）の「です」は省略できる。つまり、空繫辞は、非完了（現在）の時制のみを持っていて、過去／完了の時制を持つことができない。（主文における繫辞の過去時制が「ダった」で、それに対応する非完了時制は空繫辞である点に

については、森川（2009）を参照されたい。）この考察から、（9a）の「ダった」は、過去の時制辞を内包する繫辞「ダった」に空モデルが後接すると結論付けることができる。このように、モデルの想起用法は、（9b）のように「ダった」、あるいは（9a）のように空モデルで表現されることになる。²

以上、「のダ」構文／C分裂文の「の」節は、統語レベルのみならず談話が関与するレベルでも生起することを検証した。また、「のダ」構文末の要素、つまりC分裂文の焦点要素に後接する要素はモデルであることを明らかにし、また繫辞文とも一部対照し、分析を進めた。

3. FINPの構造上の位置

前節では、C分裂文のFinPとFINPについて議論し、「の」節がFinPの（つまり、「の」節内にモダリティ要素が含まれていない）場合、（1）の構造に従い、その構造上の位置も明らかにした。本節では、FINPの「の」節の構造上の位置を考察していきたい。具体的には、C分裂文の基底である「のダ」構文の段階で、もし「の」節がモダリティ要素、焦点要素、あるいはその両方を含めばそれはFINPであるが、そのFINPが分離CP構造の構造上どこに位置するのかを提示する。その際、C分裂文の派生過程が適切かどうかとも考察することになる。以下、「のダ」構文の「の」節内に、1）モダリティ要素が生起する場合、2）それ自体焦点の解釈を受ける要素が生起する場合、そして3）モダリティ要素と、それ自体焦点の解釈を受ける要素が共起する場合の構造を見ていきたい。

先ず、「の」節内にモデルを含む（12a-d）の例文を見てみよう。

- （12）a. [花子がそういう理由からその本を買うかもしれない]です。Cf. (6a)
- b. [太郎が午後の会議に出席しなければならない]です。
- c. [次郎が今この問題に取り組んだほうがいい]です。
- d. [ジョンが必ずメリーと会うに違いない]です。

(1 2 a-d) から、(1 3 a-d) のC分裂文が派生する。

(1 3) a. [花子がその本を買うかもしれないの] は そういう理由からです。

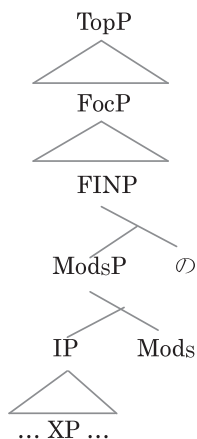
b. [太郎が出席しなければならないの] は 午後の会議に です。

c. [次郎が今取り組んだほうがいいの] は この問題に です。

d. [ジョンが必ず会うに違いないの] は メリーと です。

(1 2 a-d) の構造は、概略 (1 4) となる。(ForceP層、ModSHP層の表示はここでは省略する。)

(1 4)



FINP層の上位には、FocP層、そして下位にはModSP層が位置する。また、IP層内には、派生過程でC分裂文の焦点位置に移動する要素XPがある。例えば、(1 2 a) の例文をこの構造で見ると、「かもしれない」がModSで、また「そういう理由から」がXPであると考ええる。この構造で先ず、焦点要素XPがFocPの指定部に移動し、その後、残部節のFINPがTopPの指定部の位置へ移動する。その結果、C分裂文(1 3 a-d)が派生する。

次に、それ自体焦点の解釈を受ける要素が「のダ」構文に生起する構造に話を進めよう。ある要素が焦点の解釈を受けるのは、分裂文の焦点位置にくる場合だけではない。平叙文でも、第1節で見たように、副助詞(だ

け／のみ／ばかり) が付いた要素や、更に、格助詞「が」が付いた要素のみでも焦点の解釈を受けることができる。そのことは、(15)の「のダ」構文でも示されている。その(15)から、(16)のC分裂文が派生する。

(15) a. [太郎 (|だけ／のみ|) が宝の在り処を知っているの] ダ。

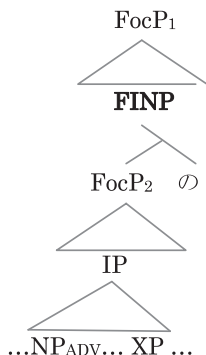
b. [学生 (ばかり) が広場に集まったの] ダ。

(16) a. [太郎 (|だけ／のみ|) が知っているの] は宝の在り処を ダ。

b. [学生 (ばかり) が集まったの] は広場に ダ。

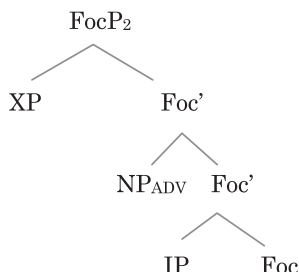
(15 a-b) の構造は、概略(17)で、副助詞の解釈のためにIP層とFINP層の間にFocP層を設けている。ここで注意を要するのは、「の」節は、談話関連のFocPを含むため、FinPではなくFINPだということである。

(17)



副助詞が付いた焦点要素の名詞句をNPADVとして、(16 a-b)への派生過程を考えてみよう。まず、NPADVがFINP内でFocP2の指定部に移動し、焦点の解釈を可能にする。そのNPADVの移動後、分裂文の焦点要素となるXPがFocP2の指定部を経由して、FocP1の指定部へと移動する。その派生過程では、FocP2は、次の図が示すように、指定部を2つ持つことになる。

(18)



上述したように、「が」が付いた名詞句は、副助詞を伴わなくてもそれ自体で焦点の解釈を受けることができるので、副助詞付きの場合と同様の移動が見られる。

ここで一見問題となりうるのは、1文に焦点が2個ありうるのかという疑問である。この疑問への解答は、久野（1973）が提示した（19）の文をヒントにして得られる。

（19）文明国が男性が平均寿命が短い。

久野は、下線部の助詞「が」は、「総記」、本稿でいう「焦点」を表すと報告している。また久野は、「[総記]の意味にしかとれない「ガ」が文中に現れると、その「ガ」が優先され、他のいかなる構成要素も[総記]の解釈をうけない。（37頁）」と述べている。例えば（19）の例文では、文頭の「文明国が」が焦点で、ほかの「男性が」や「平均寿命が」は中立的な叙述となる。

確かに久野の提示した説明は一般的には正しいと思える。しかし、次の（20）の対話から、1文に焦点が1個だけだとは必ずしも言えないことがわかる。

（20）A: どこの国が 男性だけが 平均寿命が短いですか？

B: 日本です。

上述したように、「だけ」が付いた名詞句は唯一性を表す焦点要素となる。また、疑問語を含む疑問文ではその疑問語も文の焦点となる。よって、（20A）の文には、焦点が2個存在することになる。仮に（20A）の「だ

け」を欠いても、その「男性が」にストレスを置くことができ、焦点の解釈を受けることができる。このように、1文に焦点が2個生じる場合があることが明らかになった。

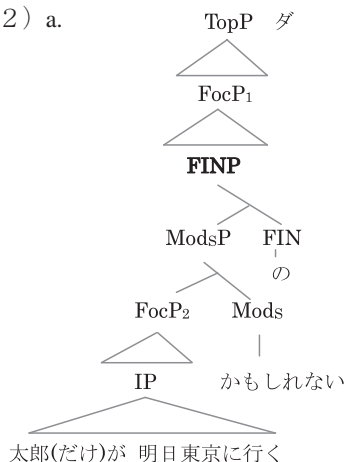
FocPの指定部の要素が焦点の解釈を受けるので、(20A)には2個の指定部が必要となる。この考え方が(15)から(16)への派生過程でも適用されとすることは妥当であろう。ただし、その派生の最終段階では、FocP1の[+foc]素性を満たす必要性から、(18)の中間構造にあるXPのFocPへの(Xバー)移動が駆動されると仮定する。

最後に、それ自体で焦点となる要素と、モダリティ要素の両方を含む「のダ」構文(21a)から、分裂文(21b)が派生する場合の構造を考察してみよう。(21a)は(22a)の構造を持つ

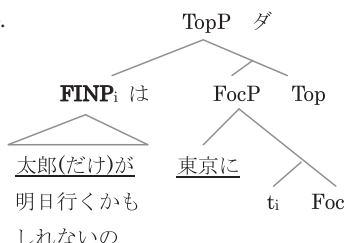
(21) a. 太郎(だけ)が明日東京に行くかもしれないのダ。

b. 太郎(だけ)が明日行くかもしれないのは東京にダ。

(22) a.



b.



図(22a)において、「太郎(だけ)が」が先ずFocP2の指定部へ移動する。次に、「東京に」がFocP2を経由して(図(18)参照)、FocP1の指定部へと移動する。最後に、残部節FINPがTopPの指定部へ移動し、C分裂文(21b)が派生する。その構造は、(22b)である。

ここまで、その基底で「の」節内に焦点要素やモダリティ要素を含むC分裂文の構造を見てきた。ここで重要なのは、「の」節がModSP層、FocP層、あるいはその両方の上位に生起している事実を、FINP層を想定することで構造上、説明できるという点である。別な言い方をすると、「の」節に対事的モデルが生起するという事実から、談話レベルの時間軸の必要性が明らかになり、談話レベルが関わってもC分裂文が派生されうることが明らかとなった。

4. 「ダ」の法性vs. 焦点性

森川（2009）では、主文末に出現する「ダ」はすべて対人的モデルModSHであると主張し、C分裂文の「ダ」をFocと仮定する Hiraiwa and Ishihara (2002) とは異なる見解であることを示した。なお、遠藤（2010）、榎原（2010）、Hasegawa (2011) などこの「ダ」をFocとしている。本節では、C分裂文も含めて、より一般的な見地から「ダ」をFocとする仮定に対し疑問を5点、提示していきたい。

その第1点目は、森川（2009）でも述べたように、そもそもFocPの主要部に基底で時制辞、あるいは命題の心理的認識（“psychological realization of the proposition,” Hasegawa 2011: 27）を表す辞が現れるのかという疑問である。それに対する、明示的な説明が出されていない。つまり、例文（23）は、その文末が「ダ」であれ「ダった」であれC分裂文であるが、「ダ」がFocなら「ダった」もFocのはずである。しかし、Focと時制が一形態素内に併存することに何ら根拠が示されていない。また、心理的な認識は、例えば助詞／助動詞のように、モダリティ要素として生起するのが普通である。

（23）[太郎がテニスをしたの]はこの公園で {ダ／ダった}。

第2点目に、「のダ」構文であるからといって必ずしもその構文内の要素に焦点が置かれるわけではない。

（24）[太郎がその本を買ったの]ダ。

「太郎が」も「の」節全体も中立の解釈が可能である。つまり、FocPの指定部へ移動する要素はない。すると、焦点の解釈を持たない文に、なぜFoc「ダ」が生起するのかという疑問が生じる。これは、統語表示に関してはなるべく少ない構成素を含むことを要求する「経済性の原理」(Chomsky 1995)にも反する。

第3点目の疑問は、「ダ」と対人的モーダルの助詞「さ」との連鎖の対比に関してである。次の例文を見てみよう。

(25) a. *[太郎が行ったの]はその公園に ダさ。

b. [太郎が行ったの]はその公園に ダったさ。

「ダさ」の連鎖は容認できないのに、なぜ「ダったさ」は容認できるのかという疑問である。(ただし、方言によっては(25a)が容認される場合があると思われる。)この点については、森川(2011a)で提案した、非断定的なモーダルの後接を回避するという音韻レベルの繫辞「ダ」の制約を、モーダル「ダ」に拡張することでこの対比の説明が可能となる。しかし、「ダ」をFocとする立場では、この疑問は疑問のままである。

第4点目として、森川(2011b)で議論した対事的モーダルがC分裂文の「ダ」の代用となりうるという事実(例えば、「かもしれない」で終わる例文(26))から、「かもしれない」もFoc位置に生じるのかという疑問が生じる。

(26) [太郎が例の本を買ったの]はこの店で かもしれない。

「ダ」をFocとする立場では、空のFocを想定せねばならないであろう。そうすると次に、例文(27)が示すように、なぜ「ダ」と「かもしれない」の連鎖が許されないのかという新たな疑問が生じる。

(27) *[太郎が例の本を買ったの]はこの店で ダかもしれない。

第5点目の疑問は、次の文が中立の抑揚で発話された場合、その文法性の対比が見られることにある。

(28) a. [昨日太郎が町で花子に出会ったの] ϕ 。

b. *[昨日太郎が町で出会ったの]は花子に ϕ 。

C分裂文（28b）の基底は「のダ」構文（28a）であるが、どうしてFoc「ダ」を欠く（28a）が許されて、そこから派生する（28b）が許されないのかという疑問への説明が求められる。この点について森川（2011b）では、「のダ」構文末が空モーダルである場合の「の」節（= FinP／FINP）の移動を阻止する「空述部の制約」を提案した。³

以上、C分裂文の「ダ」をFocと仮定したことから生じる疑問を5点提示した。これら疑問は、この「ダ」が法性を持ったモーダルの助詞／助動詞とみなすことで解消できる。

本節を閉じる前に、「の」節内にC分裂文が生起する場合の「ナ」のカテゴリに触れておきたい。

（29）[TopP [FinP 花子買ったの] は [FINP [Modsp [FocP この本を] 土の]] です。

Cf. (森川 2011b: 47)

例文（29）においてFINP内の焦点要素に「ナ」が後接している。森川（2011b）では、「の」節内の「ダ」はその変異形「ナ」で表されることから繫辞とした。しかし、その「ナ」は、C分裂文末に生起することからModspと修正しなければならない。従って、繫辞の「ダ」と同様、名詞性を持った「の」に前接して「ナ」に変化するので、「の」節内のModsp「ダ」のカテゴリは、助詞ではなく助動詞でなければならない。

5. まとめ

本稿では、森川（2011b）で残した検討課題である「の」節のカテゴリと機能を追究した。そして、モダリティ要素が「の」節内に生起できるという事実から、「の」節は統語レベルのほかに談話レベルでも生起できるという結論を導いた。つまり、「の」節は、出来事に関する時間軸を表す定性句と、その出来事を述べる話し手の心理的態度に関する時間軸を表す“定性句”の両方が構造上存在しうることを明らかにした。その結果、C分裂文末に繫辞の「ダ」が生起しうるとした森川（2011b）を修正し、C分裂文末

には対事的／対人的モーダルが必須の要素であるという森川（2009）の見解を検証したことになる。

注

¹ 森川（2009）では、C分裂文末は統語レベルの時制要素を欠くことを示した。森川（2011b）では、(7b) のような時制辞を統語レベルの時制辞と同じ取り扱いをしたため議論を複雑にしたが、本稿の立場を森川（2009）に戻すことになる。

² モーダル「でした」には更にもう1つの「仮定」の用法が考えられる。

(i) そういうことなら、[昨日 [昼食を準備しておくの] {ダった／*ダ}]。

「ダった」が完了の時制を持つことは、「昨日」が「でした」と構成をなすということから明らかである。つまり、談話レベルでも時制に関する共起制限は存在する。ちなみに、「ダった」の「仮定」の用法では、C分裂文を派生できない。

(ii) ?*昨日 [もう少し準備しておくの] は 昼食を ダった。

³ 空述部の制約とは、概略、英語の接語化現象と同様、空範疇に隣接した要素の移動を阻止するものである。C分裂文では、焦点となる要素のFocPへの移動後に、「の」節がTopPへ移動する。この「の」節の移動後の痕跡に空繫辞と空モーダルが後接している場合、文は非文法的となる。森川（2011b）では、C分裂文を基にこの制約は議論されたが、P分裂文についても適用できるものである。中立の抑揚で発話される例文 (i) を考えてみよう。

(i) [ジョンが買ったの] は 古本 ϕ 。

(ii) a. [ModsuP [TopP [IP [SC [NP ジョンが買ったの] は [NP 古本]]] [I ϕ]]]

b. [ModsuP [TopP [FocP [IP [SC [NP ジョンが買ったの] は [NP 古本]]] [I ϕ]]]
[Modsh ϕ]]

例文 (i) には、(iia) と (iib) の基底構造に基づく2通りの解釈が可能である。(iia) では、空繫辞が小節 (SC) を補部を取っている。この小節の主語節がTopPに移動するだけで、名詞句「古本」は移動せず中立の叙述的な解釈をうけ、文法的な繫辞文と判断される。一方、(iib) の構造では「古本」が焦点となる解釈であるため、先ず「古本」がFocPへ移動し、その後主語節がTopPへ移動する。つまり、P分裂文が派生されたことになる。しかし、ここでは痕跡と空モーダルを含む空範疇の連鎖が生じるため、この連鎖に空述部の制約が作用する。よって、

例文 (ii) は、P分裂文としては非文法的となる。ただし、森川 (2011b) の空述部の制約で詳述したように、もし「古本」に強勢が置かれればこの制約の適用を受けず、(i) は分裂文として解釈される。よって、森川 (2011b) で問題として取り上げた分裂文末の「ダ」の省略の可否について、分裂文は原則、モダリティ要素を必要とするが、繫辞文では繫辞／モダリティ要素は任意の要素であるという、従来仮定されてきたことを論証したことになる。

ただし、この議論は、例文 (i) の2通りの解釈の文法性判断が正しい限りにおいてである。もし、抑揚の有無に関係なく (i) が分裂文と解釈されるのなら、空述部の制約を修正する必要が生じる。この点については、今後の課題としておきたい。

参考文献

- 遠藤喜雄 (2010) 「終助詞のカートグラフィー」長谷川信子 (編) 『統語論の新展開と日本語研究—命題を超えて』 67-94 開拓社
- 長谷川信子 (2010) 「CP領域からの空主語の認可」長谷川信子 (編) 『統語論の新展開と日本語研究—命題を超えて』 31-65 開拓社
- 久野暲 (1973) 『日本文法研究』 大修館書店
- 泉原和生 (2010) 「日本語疑問文における補文標識の選択とCP領域の構造」長谷川信子 (編) 『統語論の新展開と日本語研究—命題を超えて』 95-127 開拓社
- 三上章 (1963) 『日本語の構文』 くろしお出版
- 森川正博 (2009) 『疑問文と「ダ」——統語・音・意味と談話の関係を見据えて』 ひつじ書房
- (2011a) 「繫辞の「ダ」と「である」」『名古屋外国語大学紀要 40号』 27-44.
- (2011b) 「分裂文の「ダ」」『名古屋外国語大学紀要 41号』 35-61.
- 野田尚史 (1996) 『「は」と「が」』 (仁田義雄・益岡隆志・田窪行則 (編) 新日本語文法選書 1) くろしお出版
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味II』 くろしお出版
- 渡辺明 (2005) 『ミニマリスト序説——生成文法のあらたな挑戦』 (シリーズ・言語学フロンティア) 大修館書店

Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*. MIT Press, Cambridge, MA.

Hasegawa, Nobuko (1997) "A Copula-based Analysis of Japanese Clefts: *Wa*-cleft and

- Ga-cleft*,” in Kazuko Inoue (Leader), *Researching and Verifying an Advanced Theory of Human Language*, 15-38. Kanda University of International Studies.
- _____ (2011) “On the Cleft Construction: Is it Simplex or Complex?” *Scientific Approaches to Language* 10, 13-32. Kanda University of International Studies
- Hiraiwa, Ken, and Ishihara, Shinichiro (2002) “Missing links: Cleft, Sluicing and *No-da* Construction in Japanese,” in *The Proceedings of Humit 2001. MIT Working Papers in Linguistics* 43, 35-54. MITWPL, Cambridge, MA.
- Hoji, Hajime (1987) “Japanese Clefts and Chain Binding/Recognition Effects,” ms., University of Southern California.
- _____ (1990) Theories of Anaphora and Aspects of Japanese Syntax,” ms., University of Southern California.
- Kuroda, Shige-Yuki (1965) *Generative Grammatical Studies in the Japanese Language*. Doctoral Dissertation, MIT.
- Rizzi, Luigi (1997) “The Finite Structure of the Left Periphery,” *Elements of Grammar: Handbook of Generative Syntax*, ed. by Liliane Haegeman, 281-337, Kluwer, Dordrecht.